さるかに合戦　（岡山県）

昔むかし。

さるが、山道でかきの種をひとつ拾いました。そこへ、かにが、大きなおむすびをはさみではさんで歩いて来ました。さるはそれを見て、

（ははあ。かにがおいしそうなおむすびを持っているぞ。あれを何とかして取ってやろう）と思いました。そして、

「おい、かにさん。そのおむすびとこのかきの種を取りかえないか」と声をかけました。かには、

「いんにゃ、取りかえない」といいました。さるは、

「そんなおむすび、ぱくぱくっと食べたらなくなってしまうぞ。けれど、かきの種は、植えとけば実がなって、何年でも何年でも食べられるぞ」といいました。

「ほんとうか？」

「ほんとうだとも。お腹いっぱい食べられるぞ」

「ふうん。そんないいものなら、取りかえよう」

かにはそういって、さるにおむすびをわたして、かきの種をもらいました。さるは、喜んで、おむすびをむしゃむしゃっと食べてしまいました。

かには、家に帰って、かきの種を植えました。そして、

「早うめを出せ。早うめを出せ。早う出さにゃあ、はさみでちょん切るぞ」といいました。するとめが出たので、こんどは、

「早う実がなれ、早う実がなれ。早うならにゃあ、はさみでちょん切るぞ」といいました。そうしたら、かきの木は、ずんずんのびて、大きく大きくなって、かきの実がいっぱいなりました。

かには、かきの木を見上げて、

「こりゃあ、さるのいったとおり、お腹いっぱい食べられるぞ」と、よろこびました。そして、どうやってかきを取ろうかと考えていると、そこへ、山からさるがやって来ました。さるは、

「ほら、かにさん。かきがなったじゃないか」といいました。

「うん、かきがなったよ」

「取ってやろうか」

「うん、取ってくれるとありがたい」

さるは、かきの木に登って行って、赤い良いかきの実を取っては、うしゃうしゃ、うしゃうしゃ食べました。かにが、

「わしにもかきの実取ってくれ」というと、さるは、

「おう。取ってやるぞ」といって、青い固いかきの実を取って、かにの背中にぴしゃっ、ぴしゃっとぶつけました。すると、こうらが割れて、かには死んでしまいました。さるは、

「かにのやつ、いい具合に死んじゃった」といって、かきを食べるだけ食べて、山へ帰って行きました。
すると、かにのこうらの中から、かにの子どもが、うじゃうじゃ、うじゃうじゃ、うじゃうじゃと、いっぱい、はい出てきました。かにの子どもたちは、
「ようし、親のかたきうちに行こう。みんなでいっしょに行こう」といって、うじゃうじゃ、うじゃうじゃ山に向けて上って行きました。
しばらく行くと、くりに会いました。くりは、
「うじゃうじゃがにさん、どこへ行く」とききました。
「親のかたきうちに行く」
「はあん、そりゃあいいことをする。わしもついて行って、手伝ってやる。わしはぱちくりだ」
「そりゃあ、ありがたい」
そこで、ぱちくりが仲間になって、うじゃうじゃがにとぱちくりは、山を上って行きました。
しばらく行くと、はちがぽんぽらやって来て、
「うじゃうじゃがにさん、どこへ行く」とききました。
「親のかたきうちに行く」
「はあん、そりゃあいいことをする。わしもついて行って、手伝ってやる」
「そりゃあ、ありがたい」
そこで、ぽんぽらはちも仲間になって、うじゃうじゃがにとぱちくりとぽんぽらはちは、山を上って行きました。
先へ先へと歩いて行くと、牛のくそが、べったんこう、べったんこうとやって来ました。
「うじゃうじゃがにさん、どこへ行く」
「親のかたきうちに行く」
「はあん、そりゃあいいことをする。わしもついて行って、手伝ってやる」
「そりゃあ、ありがたい」
そこで、べったん牛ぐそも仲間になって、うじゃうじゃがにとぱちくりとぽんぽらはちとべったん牛ぐそは、山を上って行きました。
しばらく行くと、もちつきの臼が、とっこんこう、とっこんこうとやって来ました。
「うじゃうじゃがにさん、どこへ行く」
「親のかたきうちに行く」
「はあん、そりゃあいいことをする。わしもついて行って、手伝ってやる」
「そりゃあ、ありがたい」
そこで、とっこんうすも仲間になって、うじゃうじゃがにとぱちくりとぽんぽらはちとべったん牛ぐそととっこんうすは、山を上って行きました。

さるのうちに着くと、さるは出かけていて留守でした。
そこで、ぱちくりがいろりの火の中にかくれました。うじゃうじゃがには、水おけの中にかくれました。ぽんぽらはちは、ふとんの中に入りました。とっこんうすは、軒の上に上がりました。べったん牛ぐそは、庭の戸口の所にすわりました。
そこへ、さるが、
「おお、さむい、さむい」といって帰って来ました。そして、いろりに当たろうとすると、ぱちくりがぱちーん、ぱちーんとはじけて、さるに飛びつきました。さるは、
「熱い、熱い。大やけどした」とさけんで、水おけの所にとんで行きました、すると、うじゃうじゃがにがうじゃうじゃ出てきて、さるにぐじゃっと食いつきました。
「こりゃあ、かなわん。食いつかれちゃあ、かなわん」
さるはふとんにもぐりこみました。すると、ぽんぽらはちが飛び出して、さるをぶんぶらぶんぶらさしました。
「こりゃあかなわん。さされちゃあかなわん」
さるは、外へとんで出ました。ところが、戸口の所で、べったん牛ぐそをふんづけて、すべって、べたんと転んでしまいました。そこへ上からとっこんうすが落ちてきて、さるは、つぶれて死んでしまいましたとさ。
むかしこっぷりどじょうの目

原話：『中国山地の昔話』稲田浩二・立石憲利編著／三省堂
再話：村上郁